

フレーベル賞童話

選外佳作の四

蝶々のくびかざり

高 桑 博 子

雨がやんで、白い雲の間からは青いくお空が見え出しました。

お日様もニコ／＼照り始めました。

からから來たのでせう、黃色い可愛い蝶々の子供が一匹、お空をひら／＼面白さうに飛んで参りました。

この春生れたばかりの小さい黃色い蝶々の子供はここへ行つてもめづらしいものばかりでした。野原には、むらさきすみれがやさしくお首をぶつて居りましたし、つくしん坊の兵隊さんは丁度氣をつけをして居りました。

菜の花畠には、きいろい菜の花がたくさん／＼やらり／＼しづかにゆれて居りました。

なの花がゆーらりくこゆれる度に、葉っぱにたまつた露の玉は、赤や青や紫や金色や銀色にキラ〜〜ピカ〜〜光りながら、コロ〜〜〜こうがりました。

黄色い蝶々の子供はお空の高い所からそれを見つけました。

「おや〜? 何だかきれいなものがあるな、あそこへ行つて見ませう。」

蝶々は、黄色いおはねを出来るだけ早くうごかして菜の花畠まで眞直にこんで参りました。

「あゝこゝだ／＼うれしいな／＼」

蝶々の子供は大よろこびで、菜の花にござりました。

「ある〜なんてきれいな玉なんでせう。あゝさうだ、これつないで首かざりにしたいなあ、

菜の花さんへ葉っぱについてるきれいな玉を少し分けてちやうだい。」

菜の花は黙つて笑つて居りました。

蝶々は一番そばにあつた、大きくてよく光るつゆの玉を取らうと思ひました。

がつて来て、蝶々のお胸にバチーンとぶつかつて、そのおへんが見えなくなつてしまひま

三

一  
おや

蝶々は「へへ、おひつくりしてしまひました。

今度は上手に取りませう。そして赤く光つたつゆの玉にそ一つお手々をのばしました。玉は今度もひしりでにコロ～ツシ～ろがつて来てお胸にバチーンとまづかつてからかへ行つてしまひました。

「おや～～」蝶々は又びつくりして、お目々を丸くしました。

「蝶々さん、いろいろ蝶々の子供さん

その時、さうか高い所から誰が呼んだやうな氣がしました。蝶々の子供はすぐ

「はあい、私を呼んだのはだなた？ さうにじらつしやるの？」と大きなお聲で言ひました。

「私はね、お日様なんですよー」

「あ、お日様」

蝶々の子供はうれしさうにお空を見上げました。お日様は蝶々も菜の花も葉っぱのつゆもみんな明るく照らしながら、ニコ～笑つていらつしやしましました。

「なあに、お日様」

蝶々は又大きなお聲で言ひました。

「蝶々さん、きれいな首がざり私にも見せてちやうだいな。」

「へへえ、お日様私まだ首がさり出来ないんですよ。」

蝶々の子供は、少し悲しそうなお顔をしました。ある日お日様は前よのまつり～ニコニコ照らしながら、

「まあ蝶々さん、あなたのお胸に光つてるきれいなおかざりが見えませんか。」

「え？」

蝶々の子供は大いそぎでお胸を見ます。まあ本當に、蝶々のやはらかなお胸には、いつのまにか、小さな～～つの玉が、たくさん～～ついて、キラ～～～それは～～きれいに光つて居りました。

「なんできれいなんでせう、誰がこんなにきれいにして下さったのかしら。」

蝶々の子供は不思議でたまりません

「ね、お日様、あなたは御存じ～」

「え、知つて居ますわよ。この玉ですよ、あなたの手とも、お體も小さくつて、重いつの玉が持てないから、コロ～～シ～～がつて来て、バチーン～お胸にぶつかつて、こんなに小さく～なつてお胸につけてあげたのですよ。」

「まあや～、つゆの玉さん、どうもありがたう」蝶々の子供はうれしさうておじぎをして、又

ひら／＼／＼／＼び始めました。

蝶々がうすいおはねをひらく動かす度に、お胸についた小さいつの玉は、キラ／＼きそ  
れは／＼きれいに光りました。

(をはり)

## 選外佳作の五

### かたつむりさん

宮 田 國 子

かたつむりさんの住んでる木の近所に、蝶々さんも、玉蟲さんも、てんたう蟲も住んで居ました。かたつむりさんは背中に何時もお家を背負つて居ますので、歩くのが大變のろく、又面倒でした。それで大抵の時はお家の中で一人で遊んで居ました。

蝶々さんや、玉蟲さんや、てんたう蟲さんは、みんなきれいなお羽がありましたので、三人はお天氣のいい日は何時もあちらこちらを飛びまはつて面白く遊んで居ました。そして三人は時々かたつむりさんのお家へ來ては、いろいろ面白いお話をしてもうげました。二三日前も